

脚本

「ひまわりと私」

作

ササキ
タツオ

《あらすじ》

進学校の高校に通う細田詩織（16）は親の期待と重圧で急性精神病の診断を受ける。

両親は詩織を田舎の伯母さんの家で療養させることにする。詩織はそこで右足に障害を持つ版画家の植野梢（49）と出会う。たくましい梢から版画を教えてもらう中で詩織は自分と向き合い、前を向いて歩き出す。

《人物表》

細田詩織（16）現在・高校生。

（6）回想での幼いころの詩織。

植野梢（49）版画家。

細田洋子（43）詩織の母。

前園京子（49）詩織の伯母。

前園健吾（50）詩織の伯父。カフェ店主。

○詩織の家・居間（夜）

細田詩織（16）、壁にかけてある《ひまわり》の版画を外し床に叩きつける。
その場になぐりと座り込む詩織。

○走っている車

後部座席に乗っている詩織。

運転している細田洋子（43）。

洋子「勉強から離れて、違う空気を吸ったら、
きっとよくなるから。伯母さんにもよろしく
言っているし」

憂鬱そうに外を見る詩織。

○ひまわり畑

走り抜けていく車。

○前園家・外観

コテージ・カフェ「前園」である。
車を降り、やってくる詩織と洋子。
前園京子（49）が手を振っている。

京子「詩織ちゃん！」

詩織、お辞儀をする。

京子「大きくなったねー、それにすごく可愛
くなっちゃって」

詩織「……」

洋子「じゃあ、姉さん、あとはよろしくね」

○同・1階・カフェ部分

北欧風の家具で統一されたカフェ。

京子に続いて詩織が入る。

詩織「お邪魔します……」

店内にお客はいない。

詩織の家と同じ版画が飾られているこ
とに気づく詩織。

カウンターの奥の厨房から前園健吾

（50）が顔を出す。

健吾「詩織ちゃん。いらっしゃい」

詩織「（お辞儀して）……おじさん、お久しぶ
りです。お世話になります」

○同・2階・娘の部屋

京子に促さて中に入る詩織。

京子「綾子の部屋なんだけど。あの子、嫁に行ったら全然帰ってこないし。おばさん、さびしかったのよ」

詩織「……」

京子「ちゃんと掃除しておいたから！　好きに使って！」

詩織「……ありがとうございます」

ドアを閉め、去る京子。

詩織はベッドに座ると部屋を眺め、横になり、静かに深く息を吐く。

○同・1階・カフェ部分

降りてくる詩織。

厨房から健吾が顔を出す。

健吾「詩織ちゃん。待ってたよー」

京子が詩織を席に案内する。

京子「さあ、座って」

健吾が水を差し出す。

健吾「うちの自慢の天然水！」

詩織の目の前に差し出された水。

健吾「さあ召し上がれ！ 東京に毒されたものには癒しの水だ」

京子「詩織ちゃん。ごめんね。こういう人だから。でもおいしいから」

詩織「いただきます……」

水をごくぐくと飲む詩織。

詩織「おいしい……」

○山並み（夕）

○前園家・2階・娘の部屋（朝・日替わり）

鳴り響く目覚まし時計を止める詩織、

○同・1階・カフェ部分（朝）

席についている詩織。

健吾と京子が朝食を持ってやってくる。

京子「今朝のメニューはねえ、当店自慢の適当サンドイッチだよ」

詩織「適當、ですか？」

京子「そう。お気楽お気軽の適當だよ」

健吾「あのな！ 手抜きだって誤解するだろ？ 新鮮な野菜をたっぷり使って作ってるんだ。まず食べてみるべし！」

詩織「いただきます……」

詩織、サンドイッチを食べる。

京子「どう？ おいしい？」

健吾「うまいに決まってるだろ」

詩織「（ほうばりながら）おいしいです」

京子「そうだ。ねえ、詩織ちゃん。よかったんだけど、カフェ手伝ってみない？」

詩織「えっ？」

○同・外観

エプロンを付けた詩織が看板を出す。

○同・1階・カフェ部分

カフェのメニューを見ている詩織。

○同・外観

杖をついて歩いてくる植野梢（49）。

○同・1階・カフェ部分

扉が開き、梢が入ってくる。

詩織「い、いらっしやいませ」

梢「あら。見ない顔」

健吾が厨房から顔を出す。

健吾「梢さん！　いらっしやい」

梢「健吾さん、京子は？」

健吾「京子なら今庭で野菜採ってるわ。すぐ呼んでくるからさ。待っててよ。詩織ちゃん、先、席に案内してあげて」

詩織「あっ、は、はい。では、こちらのテーブル席へ」

梢「私はね、いつもカウンター席なの。覚え
といて」

詩織「す、すみません……」

やってくる京子。

京子「梢！　いらっしやい」

梢「この子、新しいバイト？」

京子「東京にいる妹の子よ。詩織ちゃんっていうの。夏の間、遊びに来てるんだわ」

梢「へえー。そうなんだ。高校生？」

詩織「は、はい。細田、詩織です」

京子「こちらはね、植野梢さん。おばさんと同級生でね。ちょっとした有名なの」

梢「ちよつとやめてよ。くすぐったい。梢でいいから。よろしく」

詩織「よろしくお願いします……」

京子「梢はね、芸術家なの。うちの店にも」

と京子が壁の版画を指さす。

詩織「えっ、これ、梢、さん、が……？」

梢「ああ、それね。昔の作品なのに」

京子「私が気に入ってるからいいの」

梢「見ての通り、木版画」

京子「それだけじゃないじゃない。賞もとっ

たし。版画教室もやってるの」

詩織「すごいですね……」

梢「そんなたいしたもんじゃないわよ」

壁に飾られた版画。

○前園家・2階・娘の部屋（夜）

机に向かう詩織はノートを開く。

開かれたノートは白紙。

ペンを持つ詩織だが、ノートを閉じる。

詩織「……」

○満天の星空（夜）

○ひまわり畑（日替わり）

自転車をこぐ詩織。

○美術館・駐車場

自転車を止める詩織。

○美術館・外観

入っていく詩織。

○同・内

展示されている梢の版画の数々。

ゆっくり見て回る詩織。

素朴に咲く花から連作の山シリーズまで自然と四季を切り取った版画である。

杖をついて梢が歩いてやってくる。

振り返る詩織。

梢「あら、あなた、確か、詩織ちゃん？」

詩織「……こんにちは。私。その、おばさんに勧められて、梢さんの版画を」

梢「そうだったの。どう？ 見た感想聞かせて欲しいな」

詩織「えっ……？」

梢「どうせ私たちしかないんだから、館内貸し切りみたいなものじゃない」

詩織「……」

梢「ねえ？ どう感じたか、聞かせてよ」

詩織「えっと、それは、なんかすごい雄大で、広がりがあるって、四季折々の空気感があって、壮大というか荘厳というか、優しさで厳しさが一緒に共存している感じと

言いますか」

梢「（微笑する）あなた真面目なのね。あまりに真剣に答えてくれるからさ、おかしくなっちゃった」

詩織「……す、すみません」

梢「ほめてるの。そうだ！　ねえ、ウチのアトリエに来てみない？　そこでもっとお話ししようよ」

詩織「でも、私……」

梢は鞆からスケッチブックを取り出すとペンで地図を書き始める。

梢「はい。できた」

梢、スケッチブックから紙を切り離して詩織に渡す。

梢「待ってるから」

○道

自転車を走らせる詩織。

○梢の家・外観

やってくる詩織。

○同・内・1階・アトリエ部分

梢が詩織を案内する。

大きな部屋に作業用のテーブル。

材料の木材が周りを囲んでいる。

所々に落ちている木屑。

様々な色で刷られた木版画の作品たち

が壁に無造作に張られている。

梢「（笑って）入って。散らかってっるけど」

詩織が作品を観て回る。

梢「この辺が、最近制作していた《季節》ってタイトルの作品群でね、あっちは小さめの花とか植物を題材にしたものってところかな」

壁に貼られた作品に見入る詩織。

梢「そんなに面白い？」

詩織「うちにも、梢さんの版画が飾ってあつ

て、小さい頃からずっと見て育ったんです」

梢「そうだ！ あなたも、一つ作ってみない？」

詩織「……えっ!？」

梢「版画。作ってみたいじゃない。イマジネーション豊かだし。才能あるかもよ」

詩織「……でも」

梢「やるまえから諦める子なのかしら？」

詩織「……やってみたいです」

梢「なら決まりね」

詩織「でも、私なんかにできるでしょうか？」

梢「できるわ。私にはわかる。自分の好きなものを絵にしてみるといいわ」

詩織「好きなモノ……」

梢「ここは学校じゃないの。難しく考えないで。ピンときたものでいいの」

詩織「でも私、何が好きなのか自分でもよくわからなくて……」

梢「いい機会じゃない。自分が、何が好きなのか。何に心動かされるのか。感じるもの、描いてみたいものに向き合ってみるの。新しい何かが見つかるわよ!」

梢は白紙ノートを机に置くと詩織を座

らせる。

梢「さあ。どうぞ」

白紙のノートを前にした詩織のペンを
持つその手が震える。

詩織「私、やっぱりできません！　ごめんな

さい……！」

駆け出す詩織、去る。

○ひまわり畑（夕）

ひまわり畑の真ん中で、耳をふさいで
うずくまっている詩織。

梢が詩織に駆け寄る。

梢「詩織ちゃん！」

詩織「梢さん……」

梢「大丈夫！？」

詩織の背中をさする梢。

詩織「……すみません。じっとしていれば」

詩織の背中をさする梢。

詩織「もう大丈夫です」

梢「よかった。ねえ、詩織ちゃん。空見てご

らん」

詩織「えっ……？」

詩織、空を見上げる。

詩織「あっ……」

空には迫ってくるような夕焼け空。

詩織「綺麗……」

夕焼けを眺める詩織と梢。

○梢の家・2階・リビング（夜）

暖かいミルクを飲んでいる詩織。

梢が電話している。

梢「うん。安心して。うん。もう少し落ち着いたら。送っていくから」

電話を切る梢。

梢「事情、聞いた。詩織ちゃん。ごめんね。

私、無理させちゃったよね」

詩織「いえ……私がいけないんです」

梢「詩織ちゃん。自分を責めるのは違うよ。

どうしようもないことで苦しいってことはあるんだから」

詩織「……」

ミルクを飲む詩織。

詩織「梢さん！ アトリエ、見ていてもいいですか？」

○同・1階・アトリエ部分（夜）

暗い室内。明かりをつける。

暖色系の照明が版画を昼間とは違った印象で照らし出す。幻想的な空間だ。

見て回る詩織。

小さな一輪の花の葉脈まで繊細に彫られた版画や山の風景を切り取った版画など。

詩織「……」

○詩織のイメージ

ひまわり畑の中で、思いつき腕を伸ばして深呼吸する詩織。

○満天の星空（夜）

○道（日替わり）

晴れた空。まっすぐな道。
自転車を走らせる詩織。

○梢の家・外観

詩織が立っている。
梢が出てくる。

梢「詩織ちゃん。もういいの？」

詩織「梢さん！ 私、やっぱり版画、作って
みたいです」

梢「詩織ちゃん。でも……」

詩織「イメージができたんです！」

○同・1階・アトリエ部分

机に広げられたノート。
詩織が鉛筆でひまわりを描いていく。
珈琲を飲みながら見守る梢。
絵を描いていく詩織。

○スケッチブック

描かれた「ひまわりと少女」

○梢のアトリエ・1階・アトリエ部分

板に向かって線を書き込んでいく詩織。

× × ×

下書きの入った板を見る梢と詩織。

梢「輪郭を彫り込んで、全体を浮かび上げさせるようにしたらよさそうね」

× × ×

彫刻刀で板を彫っていく詩織。

床に落ちた木くずが増えていく……。

詩織の真剣なまなざし。

○雲のかかった山並み（夕）

○梢のアトリエ・1階・アトリエ部分（夕）

詩織と梢。

絵の具を版に塗っていく詩織。

次に紙を敷いて、バレンを使って刷る。

詩織「こんな感じですか？」

梢「いいんじゃない」

詩織は板から紙をはがす。

そこにはちゃんと刷り上がった一枚の
版面が出来上がっていた。

詩織「どう、でしょう……？」

梢「すごくいいわ。等身大のあなたが生き生きとよくでてる。強くて素敵！」

詩織「本当ですか……？」

梢「私、うそつけないから！」

微笑む梢。

詩織、涙する。

梢「詩織ちゃん……？」

涙をぬぐう詩織。

詩織「なんか。こういうので褒められるとか、私。いつぶりだろ……すごく嬉しいです」

詩織の頭をなでる梢。

○回想・詩織の幼少期・詩織の家

版面をまねてひまわりの絵を描く、幼
い詩織（6）。

詩織「ママ、ひまわり！」

洋子「詩織。上手だね」

笑顔の詩織。

（回想・おわり）

○ひまわり畑（夕）

自転車をたちこぎした詩織が風を切っ
て真っすぐな道に行く。

○前園家・外（日替わり）

洋子が来るまで待っている。

詩織を京子と健吾が見送る。

詩織「おじさん、おばさん、お世話になりま
した」

詩織を抱きしめる京子。

詩織「おばさん……」

京子「詩織ちゃん。おばさんたち、待ってる
から。いつでも自分の家だと思って帰って
きていいからね。体には十分気をつけてね」

詩織「（うなずいて）……行ってきます」

手を振る京子と健吾。

○走っている車・車内

運転している洋子。

後部座席の詩織。

詩織「お母さん、心配かけてごめん」

○ひまわり畑

ひまわり畑を抜けていく、車。

○詩織の家・内・リビング

壁に並べて飾られた二枚の版画。

もともとあったひまわりの版画と詩織

の作った《ひまわりと少女》の版画。

○道

詩織が晴れた空の下を歩いて行く。

（おわり）